



月の名前

「三日月」「十五夜の月」など、なぜ、月は数字がついた名前ではばれるのでしょうか。

「月」は満ち欠けをくり返しています。上る時間や位置、しずむ時間や位置も、日によって変わります。

満月から次の満月までは、三十日弱です。満月からだんだん欠けていき、ほぼ十五日たつと見えなくなります。この見えない月を「新月しんげつ」といいます。新月のころは、太陽とほとんど同じ位置で、太陽とともに上り、太陽とともにしずむため、太陽と月が重なる日食のとき以外は、目で見ることができません。そして、月はまた太陽からはなれて満ち始め、新月から三日めに見える月が「三日月」です。十五日めには太陽から最もはなれて満月になりますから、満月のことを「十五夜の月」といいます。

東 ひんがし の野にかぎろいの立つ見えてかえり見すれば月かたぶきぬ

かきのもとのひとまろ
柿本人麻呂

「かぎろい」とは、日が上る直前にさす、ほのかに赤い光です。

「かたぶきぬ」は、「かたむいていた」という意味です。「広い野原に立って東の方を見ると、明け方の光が見えてきた。ふり返ると、月は西にかたむいていた。」とうたっています。この短歌に出てくる「月」は、いつの月のことでしょうか。

まず、この月は、朝、日の出のころにすみかれています。また、月は、作者から見て太陽と反対の位置にあります。このことから、うたわれている月は、満月ごろの月だということがわかります。

日本人は昔から、満ち欠けや上る時間によって、月を次のようによんでいました。

新月、朔——一日ごろ。

三日月——三日ごろ。

上弦の月——七日ごろから九日ごろの月。真夜中にしずむとき、「弦」(弓のつる)の部分が上になるので、こうよんでいます。

十三夜月——十三日ごろ。

満月、望月——十五日ごろ。

十六夜の月——十六日ごろ。「いざよう」は「ためらう、ぐずぐずしている」の意味。日がくれてもすぐには出てこないで、こうよばれています。また、この日より後の月を、空に月がのこったまま夜が明けるので、「有明の月」ともいいます。

立ち待ちの月——十七日ごろ。「月が出る午後七時ごろまで立って待つ月」という意味です。

居待ちの月——十八日ごろ。「月が出る午後八時ごろまですわって待つ月」という意味です。

寝待ちの月、臥し待ちの月——十九日ごろ。「月が出る午後九時ごろまで横になって待つ月」という意味です。

下弦の月——二十日ごろから二十三日ごろまでの月。昼ごろにしずむとき、「弦」の部分が下になるので、こうよんでいます。

晦日の月——三十日ごろ。

わたしたちは一年を十二に分けて、一月、二月、三月とよんでいます。それぞれの月には、一月、二月というよび方のほかに、次のような言い方もあります。昔の暦では、四季は、一月から三月までが春、四月から六月を夏、七月から九月を秋、十月から十二月を冬としていました。

また、昔の暦の七月七日は今の暦の八月ごろで、梅雨も明けていますから、おりひめとひこ星が雨で会えないということもあまりなかったでしょうね。

春

一月……睦月（むつき）
二月……如月（きさらぎ）
三月……弥生（やよい）

夏

四月……卯月（うづき）
五月……皐月（さつき）
六月……水無月（みなづき）

秋

七月……文月（ふづき・ふみづき）
八月……葉月（はづき）
九月……長月（ながつき）

冬

十月……神無月（かんなづき）
十一月……霜月（しもつき）
十二月……師走（しわす）

